

言葉の力

山口県 下松市立久保中学校 3年
倉田 琉生（くらた りゅうき）

「お前、コロナやったん。」と笑って聞いてくる友達。僕は今年の春、今流行している新型コロナウイルスに感染してしまいました。僕は今でもその事をはっきりと覚えています。

三年前の僕は、そんなに簡単にコロナに感染することはないと安心していました。感染者数が他の県に比べて少ない山口県にいるということもあって、余計に安心しきっていました。

そんなある日のこと、体がだるいなあと思いながらも、熱はなかったのでもいつも通り学校に向かいました。しかし、学校についてのはいいものの、体がだるく、勉強どころではありませんでした。すぐに保健室に行き、早退させてもらい病院で検査を受けました。するとコロナウイルス陽性と判断されたのです。

コロナが治った次の週の部活の時のことです。その日はいつも通りグラウンドに向かっていました。そして、着くといきなり友達に、「お前コロナやったん。」と聞かれました。僕が「うん。」と答えると友達は「まじかよ。じゃあお前、あんまり近づくなよ。」と言いました。それを聞いた瞬間、僕は頭が真っ白になりました。今まで仲が良かった友達に急にそんなことを言われ、とてもショックでした。そんな現実から逃げるため「友達は僕を傷付けるつもりはなかったのかもしれない。」とか「自分の考えすぎだ。」と思うことにしました。それでも、その一言を忘れることが出来ませんでした。そして、自分がかかりたくてかかったわけではないのに、なぜかかってしまったのだろうと自分を責めるようになりました。

そんなある日のこと、別の友達が僕の様子を見て、どうしたのかと聞いてきてくれました。僕は相談するかどうか迷いました。それは僕の思い過ぎかもしれないし、わざわざ自分の問題を友達にも背負わせる必要はないと思ったからです。それでも、せっかく心配してくれた友達にも申し訳ないと思って相談することにしました。友達は僕の話真剣に聞いてくれました。おかげで、自分の気持ちを吐き出すことが出来、少し楽になりました。そして、自分の気持ちを少しずつ整理して立ち直ることが出来たのです。

その後、相談に乗ってくれた友達を交えて「お前コロナか。」と言った友達と話し合いをすることにしました。心配してくれた友達も一緒に説明し、僕の気持ちを代弁してくれました。話を聞くとやはり傷付けるつもりはな

かったそうです。コロナにかかった僕を冗談で笑わせて、元気づけようとしたということでした。それを聞いて僕は嬉しい気持ちと、その場で彼の真意を聞けばよかったという、後悔の気持ちで一杯になりました。そして、今も一時的にでも彼を信じられなかったことを申し訳なかったと思っています。

今では彼とは何でも話し、思ったことが素直に言い合える関係になっています。あれ以来、友達とのかかわり方について今まで以上に気を付けるようになりました。そして、今回のことからさまざまなことを学び、考えることができました。

一つ目は、いじめはいじめようという意思がなくても起こってしまうということです。つまり、思い違いや言葉の使い方が、いじめに発展することもあるかもしれないということです。今回相手にいじめたい、苦しめたいという気持ちがないのに、僕はつらい思いをしてしまいました。それは相手の思っていることと、自分が思っていることとで行き違いが生まれてきたからだと思います。行き違いが起きないようにするためには、相手の気持ちになって考え、言葉を選んで使ったり、疑問に思ったことは相手に尋ねてみたりすることが大切だと思います。そうすれば受け取り方の食い違いに気づくことができます。

二つ目は問題を自分一人で抱え込むのではなく、頼れる人に相談することが大切だということです。僕は有り難いことに、そばに頼りになる優しい友人がいてくれたおかげで、すぐに気持ちの整理も問題の解決もできました。相談することは相手に負担をかけてはいけないと最後まで悩みました。しかし、今は相談してよかったと思います。相談しただけで一人ではないという安心感がもてます。その安心感がもてたからこそ心に余裕が生まれ、話し合うことが出来、解決にまで至ったのだと思います。やはり自分の気持ちを誰かに聞いてもらうのは大切だと思いました。

「そういえば、あの時は本当にごめん。」と今でも友達は謝ってくれます。「いいよ。おかげで、もっと大切なものに気づけたから。」僕は前向きな気持ちで仲直りが出来ました。

今回のことを教訓にして、自分の思いを正確に相手に伝えられる言葉の力とコミュニケーション能力を身につけたいと思うようになりました。そして、困っている人やいじめに苦しんでいる人に手を差し伸べられる人間になれるよう、今までの自分と違う一歩を踏み出していきたいと思います。